大学入試の動向

「令和２年度 大学入試の結果と今後の入試動向」

大学通信　安田　賢治　氏

令和２年度　大学入試の結果と今後の入試動向

大学入試改革は最終的にどうなったのか？

大学入試改革は、今年が子年ということでもないのでしょうが、まさに『大山鳴動して鼠一匹』の状態になりました。改革の目玉だった民間英語試験の成績活用が、萩生田文科相の「身の丈」発言から、11月1日に延期が発表され、12月17日には数学と国語の記述式問題導入が見送りになりました。

では、最終的にどこがどう変わるのでしょうか。下の表を見てください。まずは大学入試センター試験が大学入学共通テストに代わります。その共通テストの英語で、リーディングが200点満点だったのが100点に、リスニングは50点満点から100点満点に変わります。さらに、英語では民間英語試験の「ライティング」「スピーキング」の成績が使われる予定だったため、「発音、アクセント、語句整序等」の問題が出題されないことになりました。これはそのまま維持され出題されません。その結果、リーディングの試験は読解力の試験になります。

また、センター試験では平均点が6割を目途に作問されていましたが、共通テストでは5割になります。優秀な生徒とそうでない生徒の差が広がることになります。その他では入試名称の変更が行われ、一般入試が一般選抜に、推薦入試が学校型推薦選抜に、ＡＯ入試が総合型選抜に替わります。

表１　センター試験と大学入学共通テストの違い

項目	センター試験		共通テスト	最終結果
名称変更	大学入試センター試験	→	大学入学共通テスト	○
	一般入試	→	一般選抜	○
	推薦入試	→	学校推薦型選抜	○
	AO入試	→	総合型選抜	○
問題作成	平均点6割を目途	→	平均点5割を目途	○
英語	2技能「リーディング」200点満点　「リスニング」50点満点	→	ともに100点満点に	○
	「発音・アクセント・語句整序の問題を出題	→	「発音・アクセント・語句整序の問題は出題しない	○
	2技能「ライティング」「スピーキング」は試験になし	→	「ライティング」「スピーキング」は民間英語試験の成績利用	×延期
国語	マーク式のみ	→	マーク式に加えて記述式問題を出題	×
数学	マーク式のみ	→	マーク式に加えて数式か短文で解答する記述式問題を出題	×

今年の入試は超安全志向の志望校選びに

今年の入試に大きく影響してきたのが、民間英語試験の成績活用と記述式問題の導入です。今年の入試に挑んだ受験生は、浪人すると、この二つの対策が必要になり、負担が重くなることを嫌って現役での大学進学を目指しました。現役進学を狙うのなら、当然ながら確実に合格できる大学・学部選びになります。一般入試対策として、模擬試験での判定がAやBの大学・学部を受け、チャレンジはしない、スベリ止めを多めに受けるとかが行われたと見られます。

負担の大きな二つがなくなりましたが、発表が11月以降では遅過ぎました。センター試験の出願は締め切られ、推薦、AO入試を目指す受験生はもう出願準備を済ませていた時期です。この2方式を活用する受験生が今年は多かったようです。今年の入試が混乱することを見越し、早めに合格を確保しようとしたわけです。一般入試に挑む受験生にとってみると、この時期は過去問に挑む頃で、今さら志望校を変えることはできません。その結果、一般入試では超安全志向の志望校選びとなりました。

今年行われた最後の大学入試センター試験の志願者は55万7,699人で、前年に比べ1万9,131人、3.3%減となりました。これはセンター試験史上最大の減少です。その上、今年は5教科7科目の平均点が、文系、理系ともに昨年に比べて20点前後の大幅ダウンとなりました。

これを受けて、国公立大志願者は全体で6.4%減。難関国立大の旧7帝大(北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大)に加え、東京工業大、一橋大などで志願者減となりました。この9大学の志願者が揃って減るのは40年間に一度もなかったことです。まさに難関校を敬遠して、確実に合格できるところを選ぶ安全志向の志望校選びでした。

一方、私立大の一般入試も3月末段階で約5%の志願者減。私立大の志願者減少は14年ぶりになりそうです。特に難関大の志願者が激減しました。早慶上理（早稲田、慶應義塾、上智、東京理科）はすべて志願者が減り、6.7%減です。すべて減るのは05年以来15年ぶりのことです。MARCH（明治、青山学院、立教、中央、法政）も揃って志願者が減り、8.1%の減少です。揃って減るのは97年以来23年ぶりの現象です。早慶上理、MARCHの9校が揃って志願者減となるのは、この40年間、一度もなかったことです。志願者が増えたのは難易度50未満の大学でした。入りやすさから狙われたと見られます。安全志向が顕著な入試でした。

特に私立大入試で志願者が減ったのが、センター試験利用入試でした。センター試験利用入試は、学習院大、慶應義塾大、上智大、国際基督教大などを除き、ほとんどの私立大で実施されています。国公立大の入試はセンター試験の成績と大学独自試験の成績で合否が決まります。ところが、私立大のセンター試験利用入試は、多くの場合、センター試験の成績だけで合否が決まります。出願してセンター試験を受けて出願すれば合否が決まるため、各大学に受験に行かずに済み、交通費などを節約できます。地方の受験生にとって、地元以外の私立大を受けるのには非常に使いやすい入試方式です。しかも受験料は一般入試の平均3万5千円の半額の1万7千円以下のところが多くなっています。国公立大第一志望の受験生にとってみれば、各私立大別の入試対策を行わずに済むため併願にはうってつけの方式です。

そのため、昨年は10%以上志願者が増えましたが、今年は逆に10%以上志願者が減りました。その理由は、合格最低点が高いことにあります。3教科型のセンター試験利用入試でも、大手人気大学だと合格には8割の得点が必要です。センター試験が基本的な出題といっても8割取るのは大変で、今年はセンター試験利用入試が敬遠されました。センター試験の志願者が大きく減ったのも、私立大志望の受験生が受けなかったからと見られます。

国公立大は5年連続の千葉大、私立大は7年連続の近畿大がトップ

表2　今年の国公立大一般入試志願者数トップ20

順位	設置	大学	志願者数	昨年比
1	国	千葉大	10,212	-399
2	国	北海道大	9,752	-589
3	国	神戸大	9,315	-644
4	国	東京大	9,259	-224
5	公	大阪府立大	8,089	-319
6	公	東京都立大	7,885	-708
7	国	京都大	7,699	-326
8	国	横浜国立大	7,581	-435
9	国	大阪大	7,462	-74
10	国	富山大	7,312	-1,125
11	国	九州大	7,241	-307
12	国	広島大	6,616	-668
13	国	静岡大	6,580	-423
14	国	信州大	6,383	-1,035
15	公	高崎経済大	6,228	247
16	国	新潟大	5,974	620
17	国	埼玉大	5,841	-355
18	国	筑波大	5,806	-778
19	公	兵庫県立大	5,800	-1,060
20	国	東北大	5,738	-514

今年の入試で、志願者が増えた大学を見ていきましょう。

新型コロナによる入試への影響が心配されましたが、2月25日からの前期試験、3月12日からの後期試験とも、混乱もなく終わりました。北海道大など、一部の国公立大では試験を中止し、センター試験の成績で合否を判定したところもありました。

今年の国公立大志願者トップ20は左の表のようになりました。志願者トップは5年連続で千葉大で1万212人でした。昨年より399人減です。今年の1万人超は1校だけになりました。2位は北海道大、3位は神戸大でした。上位3校とも後期試験の募集人員の枠が大きく、毎年、上位に来ます。一方、4位の東大は前期試験のみの志願者数です。公立大トップは5位の大阪府立大です。中期試験を実施し、志願者が多くなっています。

今年の国公立大は志願者が6.4%減で、2年ぶりの志願者減でした。そのため、表中の大学はほとんどが志願者減になっています。旧7帝大をはじめ、難関大はほとんどが志願者減となりました。

志願者が減った理由は、センター試験の志願者が大きく減ったこと、それに加えて、受験者の5教科7科目の平均点が、文系、理系とも20点前後ダウンしたことにあります。内訳を見ると国立大は7%減、公立大は5.2%減でした。前期試験は6.0%減に対して、後期試験は8.1%減となりました。国立大より入りやすい公立大が狙われたと見られます。これも今年の入試で安全志向が強かったことの証しです。

一方、私立大はというと、次ページの表３を見てください。現段階での志願者トップ20校です。近畿大は9,322人減でしたが、145,350人で７年連続トップになりました。２位は日本大、３位は早稲田大、４位は立命館大、５位は法政大、６位は千葉工業大、７位は明治大、８位は東洋大でした。ここまでが志願者10万人を超えています。８校が10万人を超えるのは史上初めてです。志願者が減少した大学が多い中、志願者が大きく増えたのが日本大。昨年、アメリカンフットボール部の不祥事から敬遠されたと見られますが、その反動もあって今年は大きく盛り返しました。日東駒専（日本大、東洋大、駒澤大、専修大）では日本大以外は志願者減となりました。

表３　今年の私立大一般入試志願者数トップ20

順位	大学	志願者数	昨年比
1	近畿大	145,350	−9,322
2	日本大	113,902	13,049
3	早稲田大	104,576	−6,762
4	立命館大	103,669	9,471
5	法政大	103,628	−11,819
6	千葉工業大	103,269	12,393
7	明治大	103,035	−8,720
8	東洋大	101,776	−20,234
9	関西大	87,625	−5,827
10	中央大	86,476	−6,210
11	立教大	61,308	−7,488
12	青山学院大	57,822	−2,582
13	東京理科大	56,355	−4,238
14	東海大	56,285	−4,075
15	京都産業大	56,220	870
16	龍谷大	53,281	−2,163
17	福岡大	52,112	1,831
18	専修大	51,024	−5,177
19	同志社大	49,946	−3,805
20	芝浦工業大	40,905	−5,600

慶應義塾大は38,454人で昨年より3,421人、8.2%減で22位でした。平成以降、最低の志願者数でした。

今年はセンター試験利用入試の志願者が大きく減りましたが、逆に３教科型受験者は微減にとどまりました。青山学院大は志願者が減っているものの、３教科型の志願者は増えています。この３教科型入試が人気ということは、やはり私立大の全体の志願者減につながります。出願しさえすれば合否が決まるセンター試験利用入試とは異なり、各大学の試験会場に出かけて受験しなければなりません。受験料も高く、気軽に併願できなかったことも影響していると見られます。

減っている大学が多い中で、志願者が増えているのは日本大の他に、立命館大、千葉工業大、京都産業大、福岡大です。関関同立（関西大、関西学院大、同志社大、立命館大）の中では立命館大のみ、産近甲龍（京都産業大、近畿大、甲南大、龍谷大）の中では京都産業大だけ志願者が増えています。グループの中で狙われたと見られます。今年は安全志向で上位の大学の志願者が減りましたが、難易度が低めの大学では志願者が増えました。

また、今年も推薦、ＡＯ入試の志願者が増え、なかでも指定校推薦の志願者が増えたのが特徴です。指定校推薦はよほどのことがない限り、不合格にはならない入試ですが、今年は指定校制推薦で不合格者を出した大学もあったようで人気ぶりが分かります。大学が予定していたより多くの学生が入学してしまい、一般入試の定員を減らしたところも多かったようで、一般入試の厳しさに拍車をかける結果となりました。大学も指定校推薦の人気を見越し、出願要件の評定平均値を上げた大学も多かったようですが、それでも志願者が減らないほどの人気だったといいます。

“理高文低”に様変わりした今年の学部人気

2015年から文系学部の卒業生の就職が改善したことを背景に、文系学部人気が続いてきました。それが、今年は傾向が変わってきました。次のページの表4を見てください。これは私立大の学部・学科系統別に昨年の志願者数を100とした時の今年の指数です。大手私立大120校を調査したものです。明らかに理系人気が高まりました。今年、志願者を増やした大学でも理工系の大学が多く、千葉工業大、東京電機大、東京工科大、神奈川工科大などです、地方でも岡山理科大、広島工業大などで志願者増となりました。医療技術、農も人気が復活しています。農学部は摂南大に新設されたことも大きく影響しました。

表4　学部系統別人気

学部系統	指数
理工系	104.2
医療技術	102.7
農	101.1
情報メディア系	98.2
教育	96.7
家政・栄養	95.6
経営	95.5
私立大平均	95.2
経済	95.0
医	94.8

学部系統	指数
商	94.6
国際	94.0
心理	94.0
看護	93.8
外国語	93.0
文・人文	91.8
社会	90.6
法	87.8
薬	87.6
社会福祉	86.3

その一方で、文系は昨年を下回ったところが多く、人気に歯止めがかかった状況になりました。

ただ、この理系人気の復活ですが、手放しで人気復活とは言えないと見ます。理由の一つは医、看護、薬など医療系の人気が低くなっているからです。基本的に理系学部受験生は国公立大第一志望の人が多くなります。理由は学費の国私間格差です。初年度納入金を比較すると、もっとも安い理工系でも、私立大は国公立大の倍になります。医学部だと9倍にもなります。そうなると、やはり国公立大との考えが強くなります。その上、国公立大では私立大ほど推薦枠が広くなく、しかも出願基準が高いため、一般入試で合格を目指したと考えられます。文系の初年度納入金を見ると、私立大の平均は国公立大の1.5倍程度ですから、理系学部ほど差が大きくなく、国公立大志望がそれほど強くないことにもつながります。理系学部志望の受験生が国公立大一般入試での合格を目指したため、併願先の私立大の理系学部も人気を集めたとも考えられます。文系学部の人気が高く、理系学部の人気が低い“文高理低”から、逆の“理高文低”にはっきり変わったかどうかは来年の動向を見ないと断言できないのではないでしょうか。

2021年の大学入試はどうなるか

いよいよ来年の入試から大学入学共通テストが実施されます。今年の最後のセンター試験で平均点が下がったのは、来年の改革の先取りで新傾向の問題が出たからと言われています。学力の3要素である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を盛り込んだ試験になります。平均点が今までの6割から5割に下がりますから、受験生の得点差が広がると見られ、得点分布も正規分布にはならず、平均点を境にふた山の得点分布になるのではと言われています。今年のセンター試験では、主要3教科の英数国の平均点が下がりました。もともと、共通テストで

は、数学Ⅰ・Ａと国語に記述式問題が出題される予定で、試験時間を延ばす予定でした。出題見送りになって試験時間は、国語は元の80分に戻されましたが、数Ⅰ・Ａは延びた70分のままになりました。数Ⅰ・Ａでは、それだけ時間がかかる問題が出されるのではないかと思われ難化すると見られます。大学への共通テストの成績提供も記述式の採点に時間がかかるため、今までより１週間遅くなると発表されていましたが、今までと変わらなくなります。国公立大の入試スケジュールは変わりません。私立大の共通テスト利用入試の日程もそれほど大きく変わらないと見られます。多くの私立大は従来のセンター試験利用入試が、共通テスト利用入試に代わるだけです。

なかには大学入試改革にあわせ、入試方式を変える大学も出てきています。今までセンター試験に一度も参加していなかった上智大と学習院大が、共通テスト利用入試を実施します。上智大は共通テスト利用入試、民間英語試験を活用したＴＥＡＰ方式、一般入試は共通テストの成績と大学独自試験の成績をあわせた試験になります。他にも青山学院大や早稲田大も学部によって、一般入試は共通テストの成績と大学独自試験の成績で合否判定します。早稲田大の政治経済学部は共通テストと大学独自試験で合否判定しますが、共通テストの数学Ⅰ・Ａを課すため、文系３教科型の受験生は受けづらくなります。立教大は文学部の１方式を除き、大学独自の英語試験を課しません。民間英語試験の成績か、共通テストの英語の成績を活用します。来年入試については、入試科目などに注意が必要でしょう。

来年入試は共通テストへの不安から安全志向になるのではないかと見られています。そうなると、早くに合格を決めたい気持ちから学校推薦型選抜、総合型選抜は人気になりそうで、一般選抜の志願者は減少するのではないかと言われています。一般選抜では、今年同様、強気にのぞんだほうが好成績を残せる可能性は高くなりますから、志望校選びが難しくなってきます。ただ、民間英語試験の成績や記述式問題の出題が見送られましたから、国公立大敬遠の動きは沈静化すると見られています。なんにせよ制度改革が行われる時には弱気になるのが普通です。それによって、「入れる大学・学部選び」をしてしまいがちですが、やはり「入りたい大学・学部選び」を行うことがますます大切になってくるのではないでしょうか。

＜入試トピックス～悩ましきかな、繰り上げ合格＞

今年は国公立大、私立大とも志願者が減少する超安全志向の入試となり、特に難関大の志願者が減少しました。すでに大学の合格発表は終わりましたが、その後も繰り上げ合格が発表されました。難関大の入試担当者は「今までは挑戦受験して合格し、すぐに入学手続きを取る受験生がかなりいたのですが、今年はあまりいなくなり、上位大学との併願者が例年より多いようで、合格しても入学しない人が増え、繰り上げ合格を今まで以上に出さないといけなくなった」と言います。志願者が減って、受験者のレベルが上がったという大学は多いのですが、今度は入学者確保で苦労しています。難関大が繰り上げ合格を出すと、既に入学手続きを取った、それより下の大学からも入学予定者が抜けていくことになります。そうなりますと、下位の大学でも繰り上げ合格を出し、この連鎖によって入学者が確定しない大学が続出します。大学は入

学定員を充足することで経営が成り立ちますから、定員割れを防ぐには繰り上げ合格を出さざるを得ません。下位の大学関係者は「新型コロナの蔓延で例年のように入学式を行えず、授業開始も５月からになると、４月になっても繰り上げ合格を出せる環境にあるので、出すかもしれない」と言います。

また、別の大学関係者は「例年、繰り上げ合格を出していますが、今までは入学式が４月１日で、３月末に繰り上げで入学を決めた学生の学生証の学生番号が困ります。すでに入学を決めていた学生は番号を決めていますので、繰り上げ合格者はその後の番号になるのです。学生番号は五十音順の並びで、繰り上げ合格者は、例えば渡辺さんの後に鈴木さんが来ることになってしまいます。時間がないので並び直せないのです。そうしたら、学生から『この番号では繰り上げ合格だと分かってしまう』とのクレームがあり、結局、入学式を４月１日から遅くすることで解決することにしました。今年はコロナ禍で入学式は中止、学生証配布も遅くなるので、こんなことにはなりませんが」と言います。繰り上げ合格を言われた受験生も入学が決まっている大学を蹴って進学するかどうか迷うところですが、大学も悩ましいようです。